

論文

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立

菅原 由美

ーワード

イスラーム化 マレー語 出版

じめに

東南アジア島嶼部で王国のイスラーム化が始まったのは三世紀末であるとされている。それ以前からムスリム商はこの地域に到達していたが、現在のインドネシア、アエ州ロクスマウエに現存するサムドウラ・パサイ王国の墓が、年号が明記された東南アジアで最も古いイスーム式の墓であることから、イスラーム国家の誕生は三世紀と説明される。その後、非常にゆっくりとしたス

史苑（第七九巻第一号）

ピードで、イスラームは東南アジア島嶼部に広がり、一五世紀に東南アジア海域世界の交易ネットワークの中心として最盛期を迎えたマラッカ王国がマレー語・マレー文化とイスラームを広める中心的役割を果たし、一七世紀半ばにはジャワを支配するマタラム王国の王が、スルタンを自称し、暦をシャカ暦からイスラーム暦に改めた「弘末一九九九」。やはり一七世紀にはじまった西欧諸国の進出は、一九世紀中葉に本格的な植民地経営に変わっていき、植民地国家が誕生しようとしていたが、一九世紀後半には、

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立（菅原）

社会におけるイスラーム化の進行がメッカ巡礼者の漸増と在野におけるイスラーム寄宿学校の急増というかたちで、顕著に見られるようになってきていた「菅原 二〇一三、六一―六三頁」。

各地でのイスラーム寄宿学校の増加に伴い、学校で使用するイスラーム諸学の教科書の需要も急増し、その結果、イスラーム書はそれまで手で書き写されていたものから、出版本が購入され、利用されるようになった。教科書は、シンガポール、インド、中東で出版され、やがてジャワでも出版され、二〇世紀初頭には、数とともに種類も社会の需要に合わせ、多様化した。本稿は、一九世紀後半から二〇世紀初頭に出版されるようになったイスラーム諸学書（キターブ）文献の成立過程を通して、当時のイスラーム化の様相を分析することを目的とする。

東南アジアで現在も広く用いられているイスラーム諸学の教科書は、現在一般にキタツプ・クニン（*kitab kuning*）と呼ばれている。インドネシア語の発音では、*kitab* は「キタツプ」という音に近い。*kitab* は本、特に宗教関係書物を意味し、*kuning* は黄色という意味を表す。つまり、直訳すると「黄色い宗教書」という意味になる。この黄色は、書物に用いられている紙の色である。イスラーム諸学書は、前述の通り、まず海外から輸入されて、用い

られるようになった。輸入され始めた当時、この書物の紙は黄土色であった。インドネシアで宗教書を出版・印刷することが可能になり、一般書籍が白紙で出版されている現在においても、「慣例」に従い、イスラーム諸学の教科書は「黄色い」紙で出版されている。それゆえに、キタツプ・クニンという呼び名が定着したようである。本稿では、以降、イスラーム研究一般に合わせ、キターブと記述する。

キターブに関する記録や研究は、オランダ植民地時代ほとんどなされておらず、ベルフが一九世紀末のイスラーム寄宿学校で使用されているキターブのタイトルを五〇点ほど記録しているが、一部のプサントレンに限られる上に、タイトルも正確なものが多い [Berg 1886]。一九八〇年代に入って、ブライネッセンが、オランダの Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde (KITLV) 図書館にインドネシア、マレーシア各地と南タイのパタニで購入した九〇〇点あまりのキターブ・コレクションを作り（現在は、ライデン大学附属図書館に移管）、現代のイスラーム寄宿学校で使用されているイスラーム書の分類をおこなったことにより、キターブの種類や内容がわかり、その結果、一九世紀のベルフの記録にあるキターブが今なお、現地社会で読まれていることが明らかになった [Bruinessen 1990]。また、プラウドフットが、シンガ

ボールの全国図書館に所蔵されているマレー諸語の出版物コレクションのカタログを作成し、マレー諸語出版物の歴史を分析した [Proudfoot 1963]。そのコレクションのなかには、多くのキターブ・クニンが含まれていた。ヘールは世界各地、特に中東の図書館に所蔵されている、東南アジアウラマーにより執筆されたキターブ（写本及び出版物）の情報を収集し、五二ページの「簡易」リストを作成した [Heer 2012]。このリストは特に、写本の情報が貴重である。さらに、川島は二〇〇七年度より、インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、タイ、ミャンマーなどの東南アジア各地、及びエジプトのカイロで現在販売されている二五〇〇点以上のキターブを収集し、上地大学図書館にキターブコレクションを作り、カタログを出版した [Kawashima 2010, 2015]。¹ したがって、現在東南アジアで使用されているキターブ資料は十分な数が集まっているが、キターブ群生成の歴史は、出版社にも、公文書にも記録がほとんど残っていないゆえに、不明な部分が多い。本稿は、上記三つのカタログ・リストに記載されている出版情報と、筆者が上智大学キターブ・コレクション制作時におこなった現地調査結果を資料として、キターブ群の歴史の一部を跡付けることを目的とする。²

一 キターブ概要

東南アジア島嶼部では、イスラーム寄宿学校が各地に存在していた。地域によって「ダヤ (dayah)」、「スラウ (sura)」、「ボンドック (pondok)」、「プサントレン (pesantren)」などという名称で呼ばれ、イスラームについて学ぶ生徒が周辺地域から集まり、知的中心となっていた。その起源は明らかではないが、特に、一九世紀から二〇世紀にかけて、メッカ巡礼者が増えると同時に、この寄宿学校も急増した。ベルフによれば、一九世紀後半、ジャワとマドウラには一万五〇〇〇〜二万の寄宿学校と二〇万人以上の生徒がいた。その五分の四は子供向けの学校であり、残りがイスラーム学の基礎とアラビア語を教える学校であり、イスラーム法や神学について専門的に学べる学校は二〇〇〜三〇〇校ほどしかなかった [Berg 1886]。

キターブは、主にこの寄宿学校で用いられてきた。キターブには、一・アラビア語原書と、二・アラビア語原書のテキストに加えて、欄外に翻訳や注釈が載っているキターブと、三・幾つかのアラビア語原書を元に、地域で利用しやすいように編集・執筆した新しいキターブの三種類がある。³ 解説や注釈は、現地語の場合とアラビア語による場合の二種類が存在する。この場合、現地語とは、多くの

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立(菅原)

場合、マレー語(ムラユ語 *bahasa Melayu*)を指す。マレー語は、東南アジア・イスラーム圏の共通語であり、ジャウィ(Jawi)と呼ばれるアラビア文字で表記されていた⁴。マレー語で書かれたキターブは、キタツプ・ジャウィ(Kitab Jawi)と呼ばれた。これらのキターブは、必要に応じて、マレー語からさらに様々な現地語にも翻訳された。ジャウィはマレー語以外に、アチェ語、ガヨ語、ミナンカバウ語、スンダ語、ジャワ語、ブギス・マカッサル語、ゴロンタロ語、テルナテ語、ウオリオ語、タウスグ語、マラナオ語、イラヌン語、マギンダナオ語、チャム語などの、主に東南アジア島嶼部各地の地方語で用いられ、特に、アラビア文字(ジャウィ文字)表記のジャワ語は、ペゴン(pegon)、ブギス・マカッサル語はセラン(*seran*)と呼ばれた。キターブは戦後、インドネシア語やマレーシア語が国語として使われるようになった時に、一部ラテン文字(ローマ字)でも書かれるようになるが、多くは今でもアラビア文字が使用されている。

解説、注釈や翻訳も含めて、キターブには次のようなジャンルが存在する。イスラーム法学(フィクフ *fiqh/fikih*)、法学理論(ウスール・アル・フィクフ *usul al-fiqh*)⁵、イスラーム神学(タウヒード *tawhid/tauhid*、アキーダ *aqida/akida*)、アラビア語文法、イスラーム神秘主義(タ

サウフ *tasawwuf/tasawuf*)・道徳、クルアーン解釈(タフシール *tafsir*)、ハディース(*hadith/hadis*)、聖者伝、祈りなどである。最も数が多いのは、フィクフである。法学書は、東南アジアの宗教学者が翻訳・注釈書を書き始めた一六世紀からすでに存在し、一九世紀にすでに主要なジャンルとなっていたことがわかっている。法学は、日常生活の中で、禁止されている行為、推奨されている行為を学ぶ、最も身近に必要な学問であるため、マレー語だけでなく、多くの地方語で翻訳されていることが多い。

ベルフが一九世紀末に調査した際に宗教寄宿学校で用いられていたキターブ五〇冊のタイトルは、一六冊(三二%)が法学、一四冊(二八%)がアラビア語文法、一〇冊(二〇%)が神学、七冊(一四%)が神秘主義、三冊(六%)がクルアーン解釈となっている [Berg 1886]。

前述のブライネッセンが一九九〇年に収集した出版キターブ・コレクションの内訳は、法学二〇%、神学一七%、アラビア語文法一二%、ハディース八%、神秘主義七%、道徳六%、祈り五%、聖者伝六%であった [Bruinessen 1990, p.229]。言語別では、アラビア語五五%、マレー語二二%、ジャワ語一三%、スンダ語四%、マドウラ語二・五%、アチェ語〇・五%、インドネシア語二%であった⁶。上智大学コレクション中カタログ化され

ているキターブの内訳は以下の通りである。法学および法理論二二・四％、アラビア語文法一八・二％、神秘主義・道徳一六・八％、神学一五・一％、祈り六・五％、ハディース及びハディース学六・五％、コーラン解釈・解釈学六・一％、聖者伝六％、哲学一・三％などである。言語別では、アラビア語が五三・七％、マレー語（インドネシア語）が一八・三％、ジャワ語・アラビア語併用一〇・六％、マドゥラ語・アラビア語併用四・三％、ジャワ語四％、マレー語・アラビア語併用二・八％、スンダ語・アラビア語併用一・五％などである [Kawashima 2012, 2015]。

これらキターブとして出版されたアラビア語原書は、様々な時代に書かれたイスラーム諸学の基本書である。例えば、東南アジアで最も古くから読まれ、そして今でも最も有名な書物は、ガザリー（Abu Hamid al-Ghazali 1058-1111）の著書 *Ihya' 'Ulum al-Din*, *Bidayat al-Hidayah*, *Minhaj al-'Abidin* の三冊である。この三冊はマレー語をはじめとする東南アジア諸語で多くの解説、注釈書、翻訳などが書かれ、出版されている。また、イブン・アター・アッラー・イस्कンダーリー（Ibn 'Ata' Allah al-Iskandari 1259-1310）によって執筆された、スーフイーの箴言集と言われる *Hikam* も現在まで非常に人気が高い。このようなアラビア語原書に対し、マレー語で解説・注

釈・翻訳をおこなう学者が一七世紀に、まずスマトラのアチェに登場し、彼らは新しいキターブを作り出した。一般に、東南アジアでは、クルアーン解釈としては、通称「ジャライン」の名で知られる *Tafsir Jalalain* が有名であり、これはジャラルディン・アル・マハリ及びジャラルディン・アル・スユティ（Jalal al-Din al-Mahalli, Jalal al-Din al-Suyuti）によって一五世紀末から一六世紀初めに執筆されたものであるが、これを一七世紀にアチェの宗教学者アブドゥルラウフ・シンキリー／シヤ・クアラ（'Abd al-Ra'uf ibn 'Ali al-Jawi al-Fansuri al-Singkili / Teungku Syiah Kuala 1615-1693）がマレー語に編集翻訳した。彼が著した *Tarjuman al-Mustafid* は東南アジアで最初の現地語によるタフシールであるとされており、中東でも出版されたマレー語キターブの代表である。ヘールのカタログに出ているシンキリーの著作は「三三タイトルある [Heer 2012, pp.12-15]。ただし、このうち一九世紀に出版が確認できるのは」 *Tarjuman al-Mustafid*, *Maw'iz al-Badi'ah* の二タイトルのみである。一七世紀のアチェにはもう一人重要なウラマーがいる。インドのグジャラート出身で、アチェの宮廷で活躍したヌルディン・ラニリー（Nur al-Din Muhammad ibn 'Ali Janji ibn Muhammad Hamid al-Raniri / Nuruddin al-Raniri 一六五八年死

去)である。後述するが、彼も多くのキターブを執筆している。一八世紀以降は東南アジア各地出身のウラマー達、マレー語によるキターブ執筆をさらに活発におこなった。パレンバン出身のアブドゥルサマド・パレンバーニー(ʿAbd al-Samad al-Jawi al-Palimbani 1704-1789)・一九世紀には、バンジャルマシンの出身のアルシャド・バンジャリー(Muhammad Arshad al-Banjari 一八二二年死去)、パタニ出身のダウド・パターニー(Dawud ibn ʿAbd Allah ibn Idris al-Fatani / Daud Patani 一八四五年死去)などが多くの書物を執筆した。バンテン出身のウマル・ナワウィ・ジャウィ・バンタニー／ナワウィ・バンテン(Muhammad ibn Umar ibn ʿArabi al-Nawawi al-Jawi al-Bantani / Nawawi Banten 1813-1897)はアラビア語で、スラマン出身のサレ・ウマル・サマラーニー／サレ・ダラット・スプラン(Muhammad Salih ibn Umar al-Samarani / Saleh Darat Semarang 一九〇三年死去)はジャワ語で多くのキターブを残した。

二 一九世紀後半のシンガポールとボンベイにおけるキターブ出版

前述の通り、ジャウィのキターブは、一九世紀後半にシ

ンガポールやボンベイで出版が始まった。はじめはマレー語で出版が始まり、次第にジャワ語やスンダ語などの地方言語でも出版されるようになっていった。シンガポールは、メッカ巡礼の通過点であったために、多くの人がこの地を利用した。また、イギリス統治下で比較的出版検閲規制が緩かったために、東南アジア諸地域向けの新聞・雑誌などの定期刊行物の多くがシンガポールで出版された[Laffan 2003, p.149]。また、ボンベイも一八九〇年以降、シンガポールとともに重要な出版地となった[Proudfoot 1994]。シンガポールのキターブ出版社の多くは、ジャワの北海岸出身のジャワ人により経営されていた。プラウドフットのカタログには、出版者として、スラマン出身のサイド・ビン・アルシャド(H. M. Said bin H. M. Arsyad)・ルンバン出身のシラジ・ビン・サレ(H. M. Siraj bin H. M. Salih)とその兄弟シディック・ビン・サン(H. M. Sidik bin Salih)・パティ出身のタイプ・ビン・ザイン(H. M. Taib bin H. M. Zain)の名前が見られる。当時、シンガポールに住むムスリムの五分の一はジャワ人で、彼らはメッカ巡礼後に、ハッジの称号を持ち、シンガポールでビジネスを始めた人々であった[Proudfoot 1993, pp.44-45]。マックグリンによると、シンガポールで出版されていたキターブのリストには、一四〇以上のタイトルが挙げられていた

[McGlynn 1993]。筆者が入手したボンベイのアル・カリームという出版社のジャウィ・キターブのリストには五〇、六〇のタイトル、プラウドフットのリストには五三タイトルが挙げられていた [Sugahara 2009; Proudfoot 1994]。

プラウドフットのカタログのなかに発見できる、シンガポール出版の最も古いキターブは、一八五九年に出版された、アルシヤド・バンジャーリーによる法学書 *Sabil al-Muhadin* である。この本は、一五世紀カイロのザカリヤ・アンサリ (Zakariya al-Ansari) の著書 *Manhaj al-Tullab* と一六世紀の南インドのマリバリ (Zayn al-Din al-Malibari) の著書 *Fath al-Mu'in* などの書物を主要な情報源とし、一七七九年にバンジャルマシンで、スルタンの命により執筆された。カタログによると、一八五九年に二回、一八七二年に一回出版されている。バンジャーリーの著作は、他にも、*Tuhfat al-Raghibin* が一八九四年に出版され、ボンベイでは、一九〇五年に *Bidayat al-Mubtadi wa-'Undat al-Awlati* も出版されている。*(Fath al-Mu'in* そのものの翻訳も一八八九年に出版されている。)

一七世紀のアチェのウラマー、ヌルディン・ラニリーが執筆した法学書 *Sirat al-Mustakim* も一八六四年にシンガポールで出版されている。他に、ラニリーの著作は、

Fath al-Mubin, *Tanbih al-'Awamm*, *Hidayat al-Habit*, *Shifa' al-Qulub* が一八九四年以前に出版されている。ヘールによれば、ラニリーの作品は全部で三二タイトル、そのうち五タイトルがシンガポールで出版された。

パレンバーニーの代表作 *Hidayat al-Salikin* も一八七二年以降にシンガポール及びボンベイで頻繁に出版されている。この本は、これは今でもマレー世界で広く読まれている著書であるが、パレンバーニーがガザリーの著書 *Bidayat al-Hidayah* の内容をマレー語で翻訳・編集したもので、一七七八年にメッカで執筆されたとされている [Kushimoto 2014, p. 7]。カタログで確認できるのは、一八七二年、一八七三年、一八八九年、一九〇五年、一九〇六年、一九一二年である。⁸⁾ 版によって、コメントが入ったり、ガザリーのアラビア語テキストが収録されていたり、編集内容は異なる。一四〇ページから二四五ページの比較的厚い本であるにも関わらず、出版が継続され、一九一二年版は四〇〇〇部出版されたと記録されている。ガザリーの著作は編集翻訳版、翻訳版などが数多く出版されている。 *Manhaj al-'Abidin* も一八九四年以前に出版されていたと記されている。また、前述の最も有名な大著 *Hyat 'Ulum al-Din* は、サレ・ダラット・スマランが、*Munhyat* というタイトルで、要約版をジャワ語で執

東南アジアにおけるイスラームの展開とキタールブ文献の成立(菅原)

筆した。これも、一八九三年以降、シンガポール及びボンベイで頻繁に出版された。カタログでは、一八九三年三回、一八九五年二回、一九〇一年二回、一九〇六年二回の出版記録がある。二二四ページ・三四三ページで、一九〇六年は三〇〇部出版されている。したがって、これもベストセラー本であった。この本も、現在でもジャワで販売されている。なお、サレ・ダラットは他にも、*Hikam, Jawharat Tauhid, Majmu'at al-Shariat al-Kafiyat li al-'Awam, Fasalatan, Lata' if al-Taharat, Minhaj al-Atqiyah, Murid al-Wajiz, Fath al-Rahman, Manasik al-Haji wa al-Umrat* など多くの著作を、シンガポールやボンベイで一八七一年〜一九一六年まで出版している。サレ・ダラットについては、後述する。

マレー語として、出版著作が多いのは、ダウド・パターニーである。ヘールのカタログによると三六タイトルの作品があるが、そのうち以下の七タイトルの著作が一九世紀後半のシンガポールで出版されている。*Bab Nikah* は一八二八年メッカにて執筆、一八七〇年、一八七五年、一八九二年に出版。*Furu 'al-Masa' il* は一八四一年にメッカにて執筆、一八七四年に出版。*Durr al-Thamin* は一八一六年にメッカにて執筆、一八八〇年と一九一三年に出版。*Sifat Dua puluh* は一八八四年に出版。*Ghayat*

al-Taqrīb は一八一一年メッカにて執筆、一八八七年出版。*Kashf al-Ghummah* は一八二一年にメッカにて執筆、一八八七年に出版。*Munyat al-Musallī* は一八二六年にメッカにて執筆、一八八七年と一九〇八年に出版。*Sullam al-Mubtadi* は一八三六年にメッカにて執筆、一八九五年出版。^⑨ダウド・パターニーは、原典が分かっている著作だけでなく、島嶼部で広く読まれていながら、原典執筆者が不明である *Bab Nikah* や *Sifat Dua Puluh* のような著作についても、編集・出版している。彼の著作も現在でも書店で販売されている。

一九世紀末にメッカのウラマーからオランダ領東インドのムスリムに対して出されたというフアトワ集 *Muhimmat al-Nafa'is* も一八九四年以前にシンガポールで出版されている [Kaptein 1995]。

他には、島嶼部にナクシユバンディ教団を広めた、ミンカンバウ出身のウラマー、イスマイル・ハリーディー・ミンカンバウイ (Ismā'il ibn 'Abd Allah al-Naqshabandi al-Khalidi al-Minankabawi 1712-1844) による *Kifayat al-Ghulam* も一八九四年以前に出版されている。また、サンバス、スンバワなどの、様々なマレー世界出身ウラマー達の名前が、シンガポールで出版されたキタールの執筆者として記載されている。こうして、多くの島嶼部出身ウラ

マーのジャワイによる著作が出版されるようになった。さらに、ボンベイでは、マレー語だけではなく、マレー語以外の現地諸語、ジャワ語、マドゥラ語、スンダ語のギター出版もみられるようになった。

他方、注意すべき点は、前述のベルフによって記録されているプサントレンの教科書ギターがほとんど出版記録に出てこないことである。ベルフの記録からでは、正確にどのギターであるかわからないものもあるが、五〇タイトル中、シンガポールとボンベイで出版が確認できるのは、八タイトルのみであった。そのうち、四つが神秘主義で、ガザリーの三作とヒカム、残りは、神学が二つ、法学が二つである。法学書はベルフの記録には十六冊も出ているにも関わらず、シンガポールの出版で確認できるのは、*Fath al-Mu'in* と次の *Safnat al-Najia* のみである。ベルフにも記録されており、写本としても有名な *Sitin Mas'alah* や *Tuhfat a-Muhitaj* は出版リストには見つけれなかった。

Safnat al-Najia はプサントレンなどのイスラーム寄宿学校で教科書として広く読まれていたギターとして有名である。これは法学の基本書で、ベルフの報告にも、*Sapinah* と記録されていることからわかるように、島嶼部において、一八七〇年代から広く使用されていたことが

わかっている。これは、アラビア語原書としてはかなり新しいもので、一九世紀にハドラマウト出身のサリム・ビン・アブドゥッラー・ビン・ソマイル (*Salim bin 'Abd Allah bin Samir*) によって執筆されたギターである。彼は、まずシンガポール、次にバタビアに移住し、その数年後の一八五四年に亡くなったが、当時の島嶼部におけるタリカ人気に非常に批判的であったとされる [Brunessen 1990, p.248]。一冊四〇〇五〇ページほどで、一九〇六年にシンガポールで、価格が〇・〇五ドルで、一万部出版されている [Proudfoot 1993, pp.450-451]。また、この本はマレー語を始め、様々な地方語にも翻訳された。

神学としては、*Jawharat al-Ta'uhid* (Ibrahim al-Lağani 著一六三二年死去) と *Kifayat al-'Awwam* (Muhammad ibn al-Shafi' al-Fudali 著) がベルフのリストに存在し、シンガポールとボンベイでも確認できる。*Jawharat al-Ta'uhid* は特にジャワで人気で、サレ・ダラットによって、ジャワ語翻訳が出され、一八八〇年代から一九〇〇年代初めに出版されている。ただ、より目につくのは、ユスフ・サヌシ (Muhammad bin Yusuf al-Sanusi 一四九〇年死去) の *Umm al-Barrhin* の様々な注釈や翻訳が一八九〇年代以降、多く出版されていることである。例えば、Muhammad Zayn al-Din ibn Muhammad Badawi al-Sumbawi による

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立(菅原)

Sinaj al-Huda ⁽⁹⁾ (一八八七年と一八九四年に少なくとも出版されている) *Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani* による *Aqidat al-Nojin* (一八九一年、一八九三年二回出版されているのが確認できる) *Muhammad Zayn ibn Jalal al-Din al-Asni* による *Sharh Umm al-Barahin* がある。

ハディースはベルフのリストには出てこないが、現在もインドネシアでよく利用されている *Bulugh al-Maram* (Ibn Hajar al-'Asqalani 著 一三七二—一四四九) が一九〇一年に出版されている。また *Mi'raj* 物語もハディースとして出版されていた。

三 一般庶民のためのキターブ

キターブは、一般にブサントレンなどの宗教寄宿学校で読まれる教科書であるとみなされてきた。しかし、一九世紀末にシンガポールやボンベイで出版されたキターブには、明らかにそうした従来の読者とは異なる読者を対象にしたものが出てきていた。つまり、宗教学校に通ったことがない人々のためのキターブが出版されるようになってきたのである。そうしたキターブの執筆者として有名であるのが、サレ・ダラットである。

彼の最も有名な著作 *Majmu'at al-Shari'at al-Kafiyat li*

al-'Awam (庶民のためのシャリーア集、以降 *Majmu'a*) は、タイトル通り、アラビア語が読めず、イスラームの基礎知識を持たない人を対象にした法学書である。*Majmu'a* は、何らかのアラビア語原典を翻訳したり、編集したりしたものではなく、ジャワの人々がムスリムとして正しい日常生活を送るために必要なコンパクトな法学の手引書であり、普段のおこないのなかで、どれが正しく、どれが正しくないか、また何をしてはいけないのか、何をすべきなのかということがまとめられた本である。易しいジャワ語で、一章ずつ、祈り、衣服、遺体、喜捨、断食、巡礼、ハラール・ハラーム、商売、貸付、結婚について、書かれている。特に多くのページが割かれているのが結婚の章九〇ページ(全体の三〇%)、祈りの章四八ページ(全体の一六%)、巡礼の章四一ページ(全体の一四%)である。結婚は、結婚の勧め、配偶者の決定方法、儀礼説明、夫婦関係、離婚・再婚方法など、祈りは、祈りの種類、方法、清め方など、巡礼は、巡礼者への忠告、巡礼を行う者の条件、巡礼行事説明などが説明されている。

Majmu'a は一八九二年、一八九四年、一八九八年にシンガポールのハジ・ムハマド・シディク (Haji Muhammad Shidik) によって、一九〇六年、一九一六年にボンベイのアル・カリーム社によって出版されている [Proudfoot

1993, pp.327-328; Salim 1991]。そして、その後、二〇世紀に入り、ジャワで出版社が開業されるようになると、ジャワの書店・出版社で出版が開始された。出版時期がはっきりわかるものとしては、オランダの KITLV コレクションに、ジャワ北海岸の街、チルボンのトコ・メッシール (Toko Mesir /Al-Mesiryra) 社で一九三四／三五年に出版された版がある。Toko Mesir が破産し、廃業した後には、やはり北海岸のプカロンガンのラジャ・ムラ (Rajah Murah) 社、スマランのトハ・プトラ (Toha Putra) 社がこの本の出版権を買取り、出版を続けた。この本は現在も、Toha Putra が販売を続けている。Majnu'ā は、モスクやムソラ (礼拝所) での寄宿学校に行くことができない、アラビア文字を読むことができない一般の人々を対象とした勉強会において、テキストとして用いられ、特にジャワの北海岸において、十分な影響力を及ぼしていた [Salim 1994]。

サレ・ダラットは Majnu'ā 以外に *Fasalatan* (礼拝) という礼拝の基礎を説明する本を執筆している。四〇／六〇ページのほどの比較的薄い本で、一八九三年に、シンガポールとボンベイで出版され、やはりその後多くの版を重ねた。一九〇六年にはボンベイで一万部出版されている。一九〇五年には、ジャワ語からスンダ語に翻訳された

版も登場した [Sugahara 2009]。この本も、ジャワ北海岸の都市スラバヤにある、最も歴史の古いキターブ書店・出版社の一つ、サリム・ナブハン (Salim ibn Nabhan) 社が続けて出版している。この *Fasalatan* がよく売れた理由の一つは、前述の Majnu'ā 同様、イスラームの知識を十分に持たない一般の人々に向けて書かれた本であり、この本が礼拝のマニュアルとして有用であったからであると考えられる。これと似たようなマレー語の著作として、*Kitab Rukun Sembalpong* という本がカタログには出ている。この著者は明らかではなく、その代わりに多くの写し手の名前が出ている。内容としては、基本の祈り、死者への祈り、断食月に必要とされる種々の祈り、水浴びをする際の祈りなど多くの祈りの章句が集められている、一六〇／二〇ページほどの本で、これはカタログで確認できる限りで、シンガポールで一八七九年、一八八五年、一八八九年、一八九三年、一八九五年に出版され、一九一一年にはジャワ語版もシンガポールで出版されている [Proudford 1993]。

この三冊は、プサントレンの教科書としてキターブ以上に、版が多く、一回に出版される冊数も多かった。一般庶民向けのキターブが、シンガポールやボンベイで出版されるようになったことから、一九世紀末に一般の人々の間に

イスラームに対する関心が高まっていたことがうかがえる。ただ、これらのキターブは、宗教的説明や出典はほとんど記述されておらず、ただ、これまでの伝統慣習の誤りが指摘され、ムスリムとして、日常生活において、してはいけないこと、しなければいけないことが説明されているマニユアルや祈祷集であり、より作法指導に関心が集中している。サレ・ダラットは、一九世紀末から急増したメッカ巡礼者に対する *Manasik al-Hajj wa al-Umrat* という巡礼マニユアルも執筆している。彼は *Majmu'a* のなかで、ただ名声を求めて、観光気分でメッカ巡礼に出かける人々を諫め、巡礼の意味を考えるように説いているが、一方で一般の人々が難解な「存在一性論 (*wahdat al-wujud*)」やジャワ神秘主義の經典の内容を知ることをはラームであるとしてもしている [al-Samarani, p.27]。

他に、特に宗教寄宿学校だけで利用されるのではなく、一般社会でも利用されるキターブとして、一般的な祈祷集がある。例えば、ムハンマド生誕祭で朗読される様々な *Maulud* のテキストが出版され始めている (カタログには一八七一年から一八八〇年代、一九〇九年)。*Barzanji* のテキストと一緒にしているものも見られた。アラビア語のテキストにマレー語の翻訳がつけられているものがあった。このような祈祷集も今では、東南アジア各地で出

(菅原)

版販売されている。さらには、*Mujarrabat* も出版リストの中に入っている。これは、身体的・精神的障害に対処するための様々な効能をもつ祈祷を集めた本の類で、一般に多くの種類が存在するが、「迷信」と捉えられることも多い。シンガポールのカタログには、*Fawa'id al-Bahiyah* というタイトルの *Mujarrabat* が一九世紀末に出版されていたことが記載されている。

このように、一九世紀後半、シンガポールとボンベイでキターブの出版が始まり、マレー語をはじめとする現地諸語によるイスラーム文献が東南アジア島嶼部に広く供給されるようになり、さらに一九世紀末には、宗教学校に通っていない人々に対しても、ムスリムとしての基礎知識や祈祷を教えるキターブが登場した。シンガポールとボンベイは、一九一〇年代までキターブの出版を続けていたことは確認できるが、それ以降の出版物はほとんど確認できない。次に説明する中東でのキターブ出版の方が結果的には長命となった。ただし、シンガポールやボンベイと中東では出版物の特徴に違いがあり、より一般社会よりのキターブは中東では出版されなかった。そうした種類のキターブは、一九二〇年代から確認できるジャワ北海岸諸都市の出版社・書店によって出版が引き継がれることとなった。

四 中東での東南アジア向けキターブ出版

一八七〇年代より、中東においても、東南アジアからの巡礼者 (Jawah) の増加に合わせ、東南アジアムスリム向けのキターブ出版が盛んになった。まず、ブーラーク (Bulak) とカイロにおいて、キターブは出版され始め [Wijoyo 1997]、カイロが東南アジア向けキターブ出版の中心地となり、続いて、一八八〇年代後半からメッカやイスタンブールでも出版されるようになった。中東においても、アラビア語のキターブだけでなく、ジャウイのキターブも出版されるようになり、シンガポールに向けて輸出され、その後東南アジアに流通するようになった。マレー語だけでなく、ジャワ語のキターブ (ペゴン) もわずかながら出版された。中東での出版は一九三〇年代まで順調に続き、その後数は減少したが一九五〇年代まで続いていた。

カイロでキターブを最も大量に執筆し、出版したのは、ナワウイ・バンテンである。彼はバンテン生まれであるが、メッカで勉学を修め、教鞭をとり、終生故郷には戻らなかったウラマーである。彼は東南アジア系ムスリムの勉学の役に立つように、マレー語ではなく、アラビア語で多くのアラビア語の原典の要約、解説書、注釈書などをキターブとして執筆し、多くが出版された。最も早くに出版され

たキターブはブーラークで一八五九年に出版された *Fath al-Mujib bi-Sharh Mukhtasar al-Khatib* である [Heer 2012: 51]。このキターブはその後、一八八八年までブーラーク、カイロ、メッカで続けて出版されている。ヘールのリストによればナワウイ・バンテンによって執筆された本は三九タイトル、そのうち中東で出版されたキターブは三八タイトルに上り、特に一八七〇年代から八〇年代に出版が開始された。この出版数は、他のキターブ執筆者に比べ、圧倒的に多い。

例えば、前述 *Safnat al-Naja* の解説書を、*Kashifat al-Saja* というタイトルで執筆しており、カイロで一八七五から一八八七年まで五回、ブーラークで一八九一年に出版された記録がある。*Safnat al-Naja* 同様に人氣があった、ハドラマウト出身のハシム・バアラウイ (‘Abd Allah ibn al-Husayn ibn Tahir ibn Muhammad ibn Hashim Ba ‘Alawi 1778-1855) によって執筆された法学書 *Sullam Taufiq* についても、解説書 *Miqat Su‘ud al-Tasdiq* を書いた。これはカイロとブーラークで一八七五年から一八八八年まで六回出版されていた。*Tawshih ‘ala Sharh Ibn Qasim al-Ghazzi, Qut al-Habib al-Gharib* は、やはり東南アジアでよく読まれている Abu Shuja‘Tsfahani 著 *Taqrib fi al-Fiqh* の Muhammad

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立 (菅原)

al-Ghazzi による解説書 *Fath al-Qarib al-Mujib* の注釈書であった。前者は、カイロで一八八三、一八八七年、一八九二年、一八九三年の四回、後者はブーラクで一八九六年、カイロで一八八三年、一八九一年、メッカで一八九一年の四回の出版記録がある。

Mar'at (Mi'raj) al-'Ubudiyyah は、ガザリーの一八九〇九年まで、カイロとブーラクで八回出版されている。これらは原典の人気も手伝い、大変なベストセラーであった [Heer 2012, p.53]。

また、彼が手がけたキターブには、法学書同様、神学書も数が多い。前述の *Umm al-Barahin* の解説書 *Dhari'at al-Yaqin*、東南アジアで人気が高い神学書 *Kifayat al-'A'wan* の *Ibrahim al-Bajuri* による解説書 *Tahqiq al-Maqam* に対する注釈書として書かれた *Tijan al-Darari*、Nahravi 著 *Durr al-Farid* の解説書 *Fath al-Majid*、*Aqidat al-'Awam* の解説書 *Nur al-Zalam*、Riyad al-Badi'ah の解説書 *Thimar al-Yani'ah*、Zayn al-Din ibn 'Abd Allah al-Malbari 著 *Manzumah fi Shu'ub al-Iman* の解説書 *Qami 'al-Tughyan* が人気であった。

さらに彼は、法学書以外にも、アラビア語文法書、伝承、ハディース、祈祷集の解説書も手がけた。有名なアラビ

ア語文法書 *Ajurrumiyyah* の解説書 *Kashf al-Murutiyyah*、Ja'far al-Barzani による「ミラージュ物語」の *Qissat al-Mir'aj* の解説書 *Durar al-Bahiyah*、Jalal al-Din al-Suyuti 著のハディースである *Lubab al-Hadith* の解説書 *Tanqih al-Qawl al-Habith*、Barzani による *Mawlid al-Nabi* の解説書として *Madarij al-Su'ud ila Ikhsa' al-Burud* と *Targhib al-Mushlaqin* などがある [Heer 2012, pp.50-57]。

彼の本は、シンガポールやボンベイでは出版された記録が見当たらないが、中東では頻繁に出版され、増加していた東南アジア出身の学生たちの教科書として、使われた。そして、二〇世紀に入ると、次第にこれらのキターブは東南アジアでも出版されるようになり、今日までそれは続いている。上智大学のキターブ・コレクションにおいて、ナワウィ・バンテンによる著作は、二〇タイトル、彼の著書の翻訳版も入ると九十八点あり、東南アジア出身ウラマーのキターブ著者としては最も収録数が多い。彼の著書は、遅くとも一九三〇年代以降、東南アジアにおけるキターブ出版の中心地となったジャワの北海岸、特に多くのキターブ出版社・書店が存在するスラバヤにおいて、大量に出版され、人気のあったものについては、ジャワ語、スンダ語、マレー語(インドネシア語)、マドゥラ語の翻訳バ

ジョンも出版された。興味深いのは、最も飛び抜けて数が多かったのは、夫婦関係についての著作 *Uqud al-Luġajn* で、これは上述のすべての言語に翻訳されている。

中東からの出版物として、最も人気があったのは、確かにナワウィ・バンテンであったが、彼に次いで、中東で出版数が多かったのは、第二章で説明をしたダウド・パターニーである。彼も、タイのパタニ出身であるが、中東で勉学を修め、帰郷しなかったウラマーである。第二章で説明した通り、彼は中東で多くのジャウィ・キターブを執筆し、それがシンガポールとボンベイで出版されているが、中東でも同様に出版されていた。彼の著書は確認できる範囲では、中東とシンガポール／ボンベイで、トータル一四タイトルが出版されているが、そのうち一三タイトルはシンガポール／ボンベイだけでなく、中東でも出版されている。従って、必ずしも十九世紀末から二〇世紀前半アラビア語キターブが主流になったわけではないことがわかる。

次にもう一つのデータとして、書店・出版社ハラビー (*Mustafa al-Babi al-Halabi wa Awladuhu*) の出版リストを挙げる。ハラビーは、かつてカイロのアズハル・モスクの近くに店を構えていた、東南アジア人向けのキターブを出版・販売する最も有名な店であった [Bruinessen 1995, p.231]。ハラビーは今もカイロで一九三〇〜五〇

年代の出版物を販売しており、完売すると、再び同じものを印刷して販売するというスタイルをとっている。表一は、筆者が二〇一一年にハラビーで調査を行った時に入手した販売リストとキターブ実物に記載されていた情報を元に作成した。実物があったものについては、書かれていた出版年を記載したが（この出版年は出版開始年という意味ではないが、少なくともこの年には出版されていたことがわかる）、実物がなかったものについては出版年や執筆者の正確なデータは入手できなかった。これによると、法学二六タイトル、神学二六タイトル、祈祷が七タイトル、神秘主義が六タイトル、アラビア語文法が二タイトル、ハディースが二タイトル、その他が九タイトルの計七四タイトルが確認できる。言語としては、確認できないものも多かったが、少なくとも、マレー語が三二タイトル、ジャワ語が二タイトル、スンダ語が二タイトル、見つかった¹⁾。シンガポールやボンベイで人気を博した、ラニーリの *Sirat al-Mustaqim*、パレンバーニーの *Hiidayat al-Salikin*、ニナンカバウィーの *Kifayat al-Ghulam* などの著作、ガザリーの *Bidayat al-Hidayah* と *Minhaj al-'Abidin* の翻訳、イスカンダーリーの *Hikam* の翻訳などが出版されていたことが確認できる。

神学については、シンガポールやボンベイでみながっ

東南アジアにおけるイスラームの展開とキターブ文献の成立 (菅原)

た新しい書も多かった。例をあげると、‘Abd al-Qadir ibn Sabir al-Mandahilin (Mandahiling) の作品 *Fath al-Rahman fi ‘Aqidat al-Iman* Ahmad ibn Muhammad Yunus Langka (Lingga) がペルー語に翻訳した *Daqa’iq al-Akhar fi Dhihr al-Jannah wa al-Nar* Muhammad Tayyib al-Ma’ud al-Banjari 著 *Miftah al-Jannah* Husayn Nasir ibn Muhammad Tayyib al-Mas’udi al-Banjari による *Tamrin al-Sibyan fi Bayan Arkan al-Islam wa al-Iman* Muhammad Salih ibn Zayn al-‘Abidin ibn Muhammad al-Fatani による *Siraj al-Qari* ‘Uthman ibn Shihab al-Din Pontianak による *Fath al-Mulafakkirin* Zayn al-‘Abidin ibn Muhammad al-Fatani による *Miftah al-Murid* と *‘Aqidat al-Najm* Raden Muhammad Mukhtar ibn Raden Natanagara Jawi Bogor による *‘Aqidat ahl al-Sunnah wa al-Jama’ah* と *Hidayat al-Mubtadi’ in ila Suluk Maslak al-Muttaqin* などが挙げられる。最後の二つがスンダ語での出版である。これらのキターブは、一九二〇年代から三〇年代にハラービーによって出版されていた。これらのジャウイ・キターブの執筆は、二〇世紀初頭に中東に増加した東南アジアからの留学生によるものである。つまり、ジャウイ・キターブは中東において、多くの留学生の

執筆によって、シンガポール出版期より、さらにその種類を増やしていったことがわかる。これらは上智大学のコレクションにも存在している。タイトル部分には、中東版のレプリントであるとの記載がまだ残っているキターブもある。中東で出版され始めた新しいキターブも、中東での出版が衰退した後、途絶えることなくジャワの出版社に引き継がれたのである。

おわりに

一九二〇年代から三〇年代、ジャウイ・キターブがジャワの北海岸諸都市で出版され始めた。そのうち最も古いとされているのが、チルボンのトコ・メッシルとスラバヤのサリム・ナブハンである。これに、プカロンガン、スマラン、バタビアが続いた [Bruinessen 1995, p.233; Sugahara 2009, p.11]。彼らは町の中心に位置するモスク周辺に広がるアラブ人街 (kampung Arab) で商売を始めたアラブ人で、当初、エジプト、シンガポール、ボンベイに本を注文して販売していたが、次第に、自ら出版するようになり、彼らの商売は今も続いている。

彼らはまずシンガポールやボンベイでのベストセラーを再販した。残念ながら、彼らの出版リストは現存せ

表1 ハラービー出版リスト

	ジャンル	タイトル	執筆者	出版年	言語
1	Doa	Targhib al-Mustaqin	Muhammad Nawawi ibn 'Umar al-Jawi al-Bantani	1952	Arabic
2	Doa	Khutbbah al-Jumat		n.d.	n.d
3	Doa	Majmu' Jalal al-Din		n.d.	n.d
4	Doa	Majmu' sharif		n.d.	n.d
5	Doa	Mu'allim al-Khitabah		n.d.	n.d
6	Doa	Mujarrabat al-Fawa'id		n.d.	n.d
7	Doa	Risalah adab al-dhikir		n.d.	n.d
8	Ethics	Hidayat al-Mubtadi'in ila Suluk Maslak al-Muttaqin	Raden Muhammad Mukhtar ibn Raden Natanagara Jawi Bogor	1927	Sunda
9	Fiqh	Hukum Jima	Ahmad ibn Sulayman Kamal Pasha	1938	Malay
10	Fiqh	Bab al-Nikah	anon	n.d.	n.d
11	Fiqh	Muhimmat al-Nafa'is fi Bayan As'ilat al-Hadith	anon	n.d.	n.d
12	Fiqh	Bidayat al-Mubtadi wa-'Umat al-Awlad	anon	n.d.	n.d
13	Fiqh	Samir al-Sibyan	Hasan al-Din ibn Muhammad Ma'sum ibn Abi Bakr	1934	Malay
14	Fiqh	Kifayat al-Ghulam	[Isma'il ibn 'Abd Allah al-Naqshabandi al-Khalidi al-Minankabawi]	n.d.	Malay
15	Fiqh	Wishah al-Afrah wa-Isbah al-Falah	Muhammad ibn Isma'il Dawud al-Fatani	1923	Malay
16	Fiqh	Kshifat al-Saja 'ala safainat al-Naja	Muhammad Nawawi ibn 'Umar al-Jawi al-Bantani		Arabic
17	Fiqh	Qut al-Habib al-Gharib	Muhammad Nawawi ibn 'Umar al-Jawi al-Bantani	1938	Arabic
18	Fiqh	Sullam al-Munajah 'ala Safinah al-Salah	Muhammad Nawawi ibn 'Umar al-Jawi al-Bantani		Arabic
19	Fiqh	Hidayat al-Sibyan	Muhammad Tayyib ibn Mas'ud al-Banjari	1936	Malay
20	Fiqh	Qurrat al-'Ayn li-Fard al-'Ayn	Muhammad Zayn al-Jawi Jambi	1924	Malay
21	Fiqh	Kashf al-Kiram fi Bayan niyat takbirat al-ihram	Muhammad Zayn ibn al-Faqih Jalal al-Din al-Ashi	1927	Malay
22	Fiqh	Sirat al-Mustaqim	Nur al-Din al-Raniri	1937	Malay
23	Fiqh	Kifayat al-Mubtadin	anon	n.d.	n.d
24	Fiqh	Maslak al-Akhyar	['Uthman ibn 'Abd Allah ibn 'Aqil ibn Yahya al-'Alawi al-Batawi]	n.d.	n.d
25	Fiqh	Miftah al-sabil	anon	n.d.	n.d
26	Fiqh	Munayat al-Musalli	anon	n.d.	n.d
27	Fiqh	Munjiyat al-Anam	anon	n.d.	n.d
28	Fiqh	Nasihah ahl Mayyit	anon	n.d.	n.d
29	Fiqh	Nazam al-Qalidah	anon	n.d.	n.d
30	Fiqh	Qawl al-Sadid	anon	n.d.	n.d
31	Hadith	Manhaj dhawi al-Nazr	Muhammad Mahfuz ibn 'Abd Allah al-Tirmisi	1985	Java
32	Hadith	Hadith al-Mi'raj	anon	n.d.	n.d
33	Nahwu	Nuzhat al-Ikhwan fi Ta'lim al-Lughat wa-Tafsir Ikhtilafat al-lisan	Abd Allah ibn Isma'il al-Ashi	1930	Malay
34	Nahwu	Sarf al-Wadih	anon	n.d.	n.d
35	Others	Kayfiyat khatm al-Quran		1923	n.d
36	Others	Jam'al Fawa'id wa-Jawahir al-Qala'id	Dawuh ibn 'Abd Allah al-Fatani	1927	Malay
37	Others	Jam 'jawami' al-Musannafat	Ismai'il ibn 'Abd al-Mutallib al-Ashi	1925	Malay
38	Others	Tuhfat al-Ikhwan fi tajwid al-Quran	Ismai'l ibn 'Abd al-Mutallib al-Ashi	1920	Malay

	ジャンル	タイトル	執筆者	出版年	言語
39	Others	Ini risalah yang kecil pada bicarakan ilmu tajwid al-Quran	Muhammad Salih ibn Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani	1923	Malay
40	Others	Siraj al-Qari	Muhammad Salih ibn Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani	1938	Malay
41	Rukun	Parukunan 'Abad al-Rashid		n.d.	n.d
42	Rukun	Parukunan Jamal al-Din		n.d.	n.d
43	Tasawwuf	Hidayat al-Salikin fi suluk maslak al-Muttaqin	Abd al-Samad al-Falimbani	1922	Malay
44	Tasawwuf	Hikam	Muhammad Salih ibn 'Umar al-Samarani	1928	Java
45	Tasawwuf	Bidayat al-Hidayat	Muhammad Zayn ibn al-Faqih Jalal al-Din al-Ashi	1923	Malay
46	Tasawwuf	Durr al-Nafis		n.d.	n.d
47	Tasawwuf	Minhaj al-'Abdin		n.d.	n.d
48	Tasawwuf	Tariqah al-Jaddidah		n.d.	n.d
49	Tawhid	Fath al-Rahman fi 'Aqa'id al-Iman	Abd al-Qadir ibn Sabir al-Mandailling	1923	Malay
50	Tawhid	Nazm al-Tawhid wa al-nasihat	Ahmad ibn 'Abd al-Ra'uf ibn 'Abd al-Rahman Malaka	1936	Malay
51	Tawhid	Daqa'iq al-Akhbar fi Dhikr Jannat wa al-Nar	Ahmad ibn Muhammad Yunus Lingga	1922	Malay
52	Tawhid	Muqaddimat al-Sibyan	anon	1930	n.d
53	Tawhid	Sharh usul al-Tahqiq	anon	1939	n.d
54	Tawhid	Tuhfat al-Raghibin	anon [Palembani? Banjari?]	1939	n.d
55	Tawhid	Durr al-Thamin	Dawud ibn 'Abd Allah al-Fatani	1923	Malay
56	Tawhid	Shu'b al-Iman	Dawud ibn 'Abd Allah al-Fatani	1936	Malay
57	Tawhid	Tamrin al-Sibyan fi Bayan Arkan al-Islam wa al-Iman	Husayn Nasir Muhammad Tayyib al-Ma'ud al-Banjari	1929	Malay
58	Tawhid	Miftah al-din lil-Mubtadi	Muhammad 'Ali ibn 'Abd al-Mutallib al-Khalidi	1921	Malay
59	Tawhid	Yawaqit wa al-Jawahir fi 'Uqubat ahl al-Kaba'ir	Muhammad 'ali ibn 'Abd al-Rashid ibn 'Abd Allah al-Jawi al-Qadi al-Sumbawi	1936	Malay
60	Tawhid	Usul al-din l'tiqad ahl al-Asunnah wa al-Jama'ah	Muhammad Mukhtar ibn 'Atarid al-Jawi al-Batawi al-Buquri	1921	Malay
61	Tawhid	Nur al-Zalam	Muhammad Nawawi ibn 'Umar al-Jawi al-Bantani	1936	Malay
62	Tawhid	Siraj al-Qari'	Muhammad Salih ibn Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani	1919	Malay
63	Tawhid	Miftah al-Jannah	Muhammad Tayyib ibn Mas'ud al-Banjari	1923	Malay
64	Tawhid	Bad 'Khlaq al-Samawat wa al-Ard	Nur al-Din al-Raniri	1929	Malay
65	Tawhid	'Aqa'id ahl al-Sunnah wa al-Jama'ah	Raden Muhammad Mukhtar ibn Raden Natanagara Jawi Bogor	1922	Sunda
66	Tawhid	Asbab al-Murtad	Umar ibn Zayn al-'Abidin Fatani	1936	Malay
67	Tawhid	Fath al-Mutafakkirin	Uthman ibn Shihab al-Din Pontianak	1930	Malay
68	Tawhid	Miftah al-Murid fi 'ilm al-Tawhid	Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani	1936	Malay
69	Tawhid	'Aqidat al-Najin	[Zayn al-'Abidin ibn Muhammad al-Fatani]	n.d.	n.d
70	Tawhid	Assas al-Islam		n.d.	n.d
71	Tawhid	Fawa'id al-Asriyah		n.d.	n.d
72	Tawhid	Risalah al-Tawhid li Muhammad 'Abduh		n.d.	n.d
73	Tawhid	Sifat dua puluh		n.d.	n.d
74	Tawhid	Umdat al-Ghulam		n.d.	n.d

ず、また出版年が記されているキターブも数が少ないが、一九三〇年代にトコ・メツシルとサリム・ナブハンが出版したものについては、出版年が記載されているものがみつかる。例えば、KITLVコレクションに、トコ・メツシルによって一九二九年と一九三四年によって出版されたサレ・ダラットの *Munajat saking Ihyā' Ulum al-Din*、一九三五年に出版された *Majmu'ā* サリム・ナブハンによって一九三三年に出版された *Fasalatan* の実物が保管されている [Sugahara 2009, pp.8-10]。キターブ出版社は、二〇世紀前半にジャワの北海岸、特にスラバヤに最大のキターブ出版・書店街を形成し、その後、東南アジア各地にも拡散していった。

ジャワイ・キターブの出版地は一九世紀後半から、シンガポール、ボンベイ、中東、そして二〇世紀に入り、ジャワ北海岸諸都市へと変わっていった。

それまでイスラーム寄宿学校において写本され、教科書として使われていたキターブは、出版されることによって、より人々に入手しやすいものにならっていった。東南アジアのムスリムは、寄宿学校で学ぶことなしに、キターブを購入して、イスラームについて学ぶことが可能となり、一七世紀から東南アジアのウラマーによってマレー語で書かれたキターブは、より広い読者の手にわたるようになって

た。さらに、イスラームについて意識をし始めた一般の人々に向けた、広い読者層を想定したキターブも登場し、シンガポールやボンベイではベストセラーが生まれた。そうしたキターブは、シンガポールとボンベイから出版業が撤退しても、引き続きジャワ北海岸で出版され続けた。例えば、*Majmu'ā* は、チルボン、プカロンガン、スマランへと出版地を変えながら、生き残り続けた。

他方、同じように一八七〇年代にジャワイ・キターブの出版を始めた中東では、一七〜一八世紀の東南アジア出身ウラマーの作品だけでなく、新たなアラビア語原典の翻訳書、解説書、注釈書の出版がさらに増加し、古典的法学書に加え、神学書の新たな解釈書・注釈書が出版された。これらは一般向けではなく、むしろ二〇世紀初頭に急増したイスラームを学ぶ留学生によって、イスラームを学ぶ学生に向けて書かれたものであったと想像できる。これらのキターブも中東での出版が停滞した後、ジャワ北海岸に出版は引き継がれた。こうして、シンガポールやボンベイでの出版キターブ、中東で出版されたキターブは、すべてジャワに引き継がれ、その後東南アジア各地で出版されるキターブ群を構成していくことになったのである。

引用文献

- Berg, L. W. C. van den
 1886 “Het Mohammedaansche Godsdienstonderwijs op Java en Madura en de daarbij Gebruikte Arabische Boeken”, *Tijdschrift voor het Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 31, pp.518-555.
- Bruinessen, Martin van
 1990 “*Kitab Kuning*: Books in Arabic script use in the *Pesanten* Milieu.” *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 146(2/3), pp.226-269.
- Proudfoot, I.
 1993 *Early Malay Printed Books; A Provisional Account of Materials Published in the Singapore-Malaysia Area up to 1920, Noting Holdings in Major Public Collections*. Kuala Lumpur, Academy of Malay Studies and the Library, University of Malaya.
- Proudfoot, I.
 1994 “Malay books printed in Bombay: a report on sources for historical bibliography”, *Kekal Abadi* 13(3), pp.1-20.
- Heer, Nicholas.
 2012 *A Concise Handlist of Jawi Authors and Their Works*. Version 2.3. Seattle, Washington. URL: <http://faculty.washington.edu/heer/handlist23.pdf> (Last checked 2019.1.31)
- Kaptein, Nico J. G.
 1995 “Meccan Fatwas from the End of the Nineteenth Century on Indonesian Affairs”, *Studia Islamika* 2 (4), pp.141-160.
- Kawashima, Midori et al eds.
 2010 *A Provisional Catalogue of Southeast Asian kitabs of Sophia University*, Tokyo, Institute of Asian Cultures-Center for Islamic Studies, Sophia University.
- 2015 *A Provisional Catalogue of Southeast Asian kitabs of Sophia University (second version)*, Tokyo, Institute of Asian Cultures-Center for Islamic Area Studies, Sophia University. URL: http://dept.sophia.ac.jp/is/ia/en/library_info/collection/kitab2nd.pdf (Last checked 2019.1.31)
- Kushimoto, Hiroko.
 2014 “Preliminary Mapping of the Tasawwuf texts in the Malay World: Hidayat al Salikin and Some Related Texts” in Kawashima, Midori (ed), *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (2): Papers on Tasawwuf and Fatwa Texts Presented at the Sophia University Workshop on May 20, 2012*,

- pp.1-23, Tokyo. Institute of Asian Culture, Center for Islamic Studies, Sophia University,
Laffan, Michael Francis.
- 2003 *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia; The Umma below the winds*. London, Routledge Curzon.
- McGlynn, J. H., ed.
- 1998 *Language and Literature. Indonesian Heritage* 10, Singapore. Archipelago Press.
- Salim, Abdullah.
- 1991 “Majmu‘at al-Syari‘at al-Kafiyat li al-‘Awam, Karya Syaikh Muhammad Shalih Ibn ‘Umar al-Samarani”. Ph.D. Dissertation, Fakultas Pasca Sarjana, Institut Agama Islam Negeri Syarif Hidayatullah, Jakarta.
- al-Samarani, Muhammad Shalih ibn ‘Umar.
- n.d. *Majmu‘at al-Shari‘at al-Kafiyat li al-‘Awam*, Semarang, Toha Putra.
- Sugahara, Yumi.
- 2009 “The publication of vernacular Islamic textbooks and Islamization in Southeast Asia <Muslim networks and movements in Asia. Part1:Jawi’ and ideas of community in Southeast Asia>” 『土智（チン）』 27, pp.21-36.
- Sugahara, Yumi.

- 2012 “Towards Broadening the Audience: The Role of Authors and Publishers of Jawi Kitabs from the 19th to 20th Century in Southeast Asia” SUGAHARA Yumi ed. *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs: Paper of the Workshop held at Sophia University, Tokyo, Japan on October 23, 2011*. NIHU Program Islamic Area Studies SIAS Working Paper Series No.14. pp.19-34, Tokyo, Institute of Asian Cultures-Center for Islamic Studies, Sophia University.
- Wijoyo, Alex Soesilo.
- 1997 “Shaykh Nawawi of Banten: Texts, Authority, and the Gloss Tradition, Ph.D. dissertation, Colombia University.
- 菅原由美
- 二〇一三 『オランダ植民地体制下ジャワにおける宗教運動—写本に見る十九世紀インドネシアのイスラーム潮流』 大阪大学出版会。
- 弘末雅士
- 一九九九 「東南アジアにおけるイスラームの展開」 『岩波講座 世界の歴史六—南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開—一五世紀』 一八一—二〇〇頁、岩波書店。

註

- (1) 東南アジアキタábコレクションは、アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点グループ二「東南アジア・イスラームの展開」(二〇〇七―二〇一〇年度)、およびイスラーム研究センター「東南アジア・ムスリムと近代」研究班(二〇一―二〇一五年度)の研究活動成果である。http://dept.sophia.ac.jp/isiaclibrary_info/collection/index.html
- (2) 本稿は「[Sugahara 2009][Sugahara2012]に情報追加及び改定をして作成した原稿である。
- (3) 本稿ではアラビア語原文テキストのことを *matn/ matan*、解説のことを *sharh/ syarah*、注釈のことを *hashiya*、*hasiyah*と呼ぶ。
- (4) ジャワイ文字には、通常のアラビア文字に加え、*p, c, ng, n, v*を表記するために(一)は一九八六年マレーシアで考案、点を増やした新しい六つの文字が追加されている。現在、アラビア文字綴りのマレー語は、ジャワイ(*jawi*)またはアラブ・ムラユ(*Arab Melayu*)と呼ばれている。東南アジアが西欧列強によって、植民地分割され、インドネシアとマレーシアという国家が成立していく過程において、マレー語はインドネシア語とマレーシア語という「国語」に分けられ、文字も次第にローマ字綴りに置き換えられていった。
- (5) 二〇世紀に入って、ウスール・アル・フィクフ(*usul al-fiqh* 法理論)の解説書がジャワ人宗教学者によって書かれるようになった。つまり、法を丸暗記するのではなく、法についてさらに理解を深めようとする流れが、改革派によって導入され、その結果として、現在では法理論は中上級向けの主要なカリキュラムの一つとなっている。
- (6) 現地語については、アラビア語との併用のものも含まれると考えられる。
- (7) 一八八四年にイスタンブールで、一八八五年にブラークで出版されたことが確認できる。
- (8) タイトルが *Bidayat al-Salikin* になったり、*Hidayat Salikin* になったりしているが、その説明を見ると、おそらく同じものを指していると思われる。バージョンによって、編集の仕方は異なる。
- (9) 執筆年に関する情報は[Heer 2012]に基づく。
- (10) [Proudfoot 1993]には *Siraj al-Hadi* と記載されている。
- (11) タイトルから執筆者や言語がわかるものもあるが、翻訳である可能性もあるため、実物確認できないものについては不明とした。
- (12) *'Aqidat al-Najin* は *Ahmad ibn Muhammad Zayn ibn Mustafa ibn Muhammad al-Fatani* の作品とする説もある。
(大阪大学言語文化研究科准教授)

On the Publishing of Kitab Literature and the Expansion of Islam in Southeast Asia in the 19th and 20th centuries

SUGAHARA, Yumi

During the 19th and 20th centuries, insular Southeast Asia began to experience a fresh wave of Islamization, marked by both a considerable increase in the number of pilgrims to Mecca, and an increase of Islamic schools (*pesantren*, *pondok*, *dayah* and so on) in local villages. The demand for Islamic textbooks called *kitab* also increased in proportion to the number of the students of those schools. The technique of printing, which had just been introduced into the Islamic world in the 19th century, favoured the business of publishing *kitab*s in Singapore and Bombay. In the 20th century, these *kitab*s began to be published in Java which allowed to tailor them to the requirements of the local society. In the process, new types of *kitab*s were created. These were concise and addressed the common urban people who had not received training in Islamic schools, focusing on rules of how to lead one's daily life as a virtuous Muslim. Islamic knowledge, which until then had been relatively closed inside the Islamic schools, now became accessible to a wider audience. At the same time *kitab*s from the Middle East containing commentaries and translations of the classical Arabic textbooks increased in number. These were written by Southeast Asian Muslim scholars living in the Middle East; they aimed in the first place at students of Islamic dogma. Today, the business of publishing *kitab*s for the Indonesian market has almost disappeared from Mecca and Cairo, and also from Singapore and Bombay. Publication is concentrated in Southeast Asia, mainly in Indonesia. The *kitab*s once published in Singapore, Bombay, and the Middle East can still be found, as a historical enrichment of the *kitab*s circulating in Southeast Asia.